

ふれあい雪谷

平成13年
新年号



だま

今年もよろしく
お願い申し上げます



(東中 Y. Sさんの作品)

平成十三年 元旦



母校の思い出 ④ そして還暦クラス会

昭和21年4月、小池小学校戦後初めての入学だった。

就学前だった私たちは「学童疎開」は免れたものの、焼い弾の嵐の中で家は焼失、父は戦地から帰らず、親類縁者を頼っての「家族疎開」から小池の地に戻ったばかりだった。

焼けただれたガラスや、タイルの焼け跡の杉板一枚張りの暗い教室だった。しかも教室は不足し、私たち1年生は赤松小学校へ通うという有り様だった。

そして50年以上が流れた昨年5月、恩師横溝昭平先生(小池小学校第2期卒)の古希と私たちの還暦祝いを兼ねて、クラス会を開いた。母校正門になつかしい白髪童顔(?)が北から南から集まってきた。

授業中だったが、校長先生のご好意で、30人の還暦小学生(?)が校内一巡となった。セピア色の思い出話が飛び交う。

半世紀を経た今でも、私たちは恵まれていたと思う。新しい民主教育の強い息吹の熱血先生たちがいた。そして学校周辺の里山を思わせる自然があった。

洗足池、小池は昔のままだった。その頃は、森、林、小川、近隣農家の広々とした緑の畑が散在し、私たちは日の暮れるのも忘れて裸足で、トンボ、鳥を追い、魚やえびガニを探し、駆け巡った。

60歳を過ぎた幼な友だちの笑顔の中で、私は胸が熱くなっていた。

(東中 中村 正幸)



サークル紹介 ①

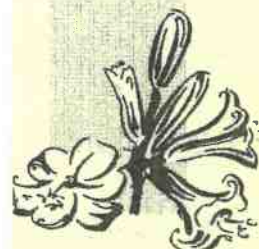
昭和五十四年、仲池上に老人いこいの家が



完成したのと同時に、それぞれのクラブ活動が始まり、いけ花(草月)のクラブもスタートしました。

毎月、第二、第四水曜日の午前中が稽古日です。現在、二十人程で、和気あいあいとした雰囲気の中で、活動しています。

毎回、それぞれ、個性的な作品が出来上がります。それを皆で拝見し、批評しあうのも楽しい一時です。



(上池上 田中 春荘)

活動の一つとして毎年、子

安八幡の大祭(九月の第一の土・日曜

日)にクラブ有志十五人程で献花

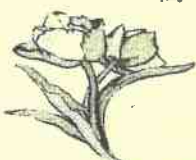
を続けています。一人ひとり違う

花材を使うので、花材選びも大変

です。また、九月初旬の残暑の厳しい

時ですので、花の手入れには苦勞

しますが、作品がきれいに出来上



がった時の笑顔は最高です。

私の健康法 ⑥

雪谷の里に生まれて八十

二年数カ月の歳月が過ぎ、老齡社会の一員とな

りました。若い頃は胃腸

が弱く食物に好き嫌いがあ

りました。今では何でも食べるよ

うになりました。特に果物が好物

で、毎日食後何かしらをとってい

ます。

通院することがあっても入院する

ことはなく、幸いと思っています。

若い頃は、煙草を好みました。酒は家

では殆ど飲まず、宴席で一合弱程

度です。日常生活は庭の掃除も植

木の手入れもせず、いたって無精者

です。



現在幾つかの団体に携わっている関係上、会議などで月のうち半分は出かけています。役に立たないと思いつながら出席するのは、義務感からでしょうか。

趣味は、保健体育のつもりで四十年前からゴルフをやっています。今ではあまりスコアにとらわれず、歩くことに専念しています。

普段は朝寝坊ですが、ゴルフの時だけは五時に起床します。朝食を済ませた頃に迎えが来てくれるので出かけます。今後体力の続く限り、頑張りたと思っています。



(東雪 永久保 勝利)

【編集後記】
新年おめでとございます。
「ふれあい雪谷」は創刊以来十一年目になりました。今後とも、より親しまれる「地域による、地域のための情報紙作り」を目指し、委員一同努力してまいります。皆様のご支援をお願いいたします。
昨年はオリンピック選手の活躍、ノーベル賞受賞と、明るいニュースがありました。はつらつとした気持ちで、新たな二十一世紀を邁進したいと思っています。
(池の台 岡野 喜代子)

【発行】 わがまち大田雪谷地区推進委員会
【編集】 ふれあい雪谷編集委員会
連絡先 雪谷特別出張所
大田区東雪谷四一三二二
電話 三七二九一五一七
【発行日】 平成十三年一月一日
通巻第四十二号

おめでとう!!

21世紀にはぼたく新成人たち

今年、区内で成人式を迎えるのは約7,400人。
この新世紀を大人として歩みはじめる、雪谷地区の
新成人の方に抱負を語っていただきました。

これからは自分の責任で生きていく、本当の意味のスタート
ラインに立ったような気がする。

少年Aという表現も実名が出る年齢になった。だからと言っ
て、何でも両親に相談することなく、勝手に行動することでは
ない。

義務教育を終え、高校そして大学進学がスタンダードである
現代社会。私としては、何の目的もなく生きてゆく事に対して
不満を持っている。だからといって、自分でもこれが絶対にし
たいということが一本にしほれない。いくつかの選択肢の中か
ら夢中になれ、好きであることに向うことに決めようと思う。

“自分で考える”という家庭環境の中で育った私としては、行
動する前にじっくりと調べ上げてから、両親に相談し、アドバ
イスを得てから結論を出すようにしている。

20歳になってから、今までとは違ったジャン
ルにも挑戦し、祖父の口癖であった“話し上手”
より聞き上手“石の上にも三年”という言葉思い
起こして、夢を実現できるようにスタートし
たいと思う。



(希望ヶ丘 杉山 健一郎)

21世紀 年男・年女 今年の抱負

今 年は小学校の最上級生になり
ます。勉強はもちろんで
すが、友達との遊びや、金管バン
ドでの活動など、これから卒業へ
向けて思い出をたくさん作ってい
きたいです。

今年の目標は、金管でトラン
ペットがもっと上達すること、
習字ももっとうまくなればと
思います。

【12歳】 洗小 石川台

田村 静香



巳 年生まれは、一生お金に不
自由しない」と暦に書い
てあったが、私には縁がない。し
かし、程々に働いて、貯めること
は怠らない。

去年買ったパソコンを
マニュアルを読みながら
独学でやっている。操作
は難しいが、なぜか面白い。

IT革命の今年、インター
ネットで新しい世界を開きたい。
【48歳】 東雪 N. N



21 世紀に年女を迎えるラッ
キーな今年。

私は今、高齢者を中心としたヨ
ガと、足裏健康法の指導を行って
おります。

“自分の健康は自分で守る”
という言葉に胸に、自分自身をは
じめ一人でも多くの方が元気で長
生きできるよう、これからもス
ポーツインストラ
クターとして、運
動指導に取り組ん
でいきたいと思い
ます。

皆さんも一緒に
頑張りましょう!

【36歳】 南雪谷 A. N



今 年で7回目の年男を迎えま
す。“気力があればなんでも
できる”と言う信念のもと、今で
も現役で仕事をし、絵・旅行・ス
ポーツ等多くの趣味を楽しんでい
ます。

今年は新しい時代を迎える21
世紀。健康を第一に考え“気力”を
モットーに充実した一年にしたい
ものです。

【84歳】 上池上 山田 正



今 年は巳年、年女である。
雪谷人になって35年が経
ち、周囲も変わり家族も世代交代
となる。

一生懸命働いてきたが60年の
歳月の長さに体も疲れ、昨年は体
調を悪くしたので、これからは無
理をせず健康に気をつけ、自分を
大切にしながら日々を送りたいと思
う。

【60歳】 東中 中村好子

20 世紀から21世紀へ大きな時代の変わり目に、私も還暦を迎える。
29歳で結婚し4人の子供に恵まれた。3、40代は子育てに頑張っ
てきた。苦しい時もまた大変な時もあったが、子供たちの成長が自分自身
の働く喜びでもあった。

今、子供たちも大きくなり、長女は嫁いで小学1年生の孫もいる。長
男、次女は社会人として仕事に頑張っており、三女は大学を目指して猛勉
強中である。40代に独立した今の仕事も順調に来ており、さらなる繁栄
を願い頑張っていく決意である。

21世紀と還暦を機に健康第一で、世のため、人のためになる人生を歩
んでいきたいと思う昨今である。

【60歳】 希望ヶ丘 佐俣 猛

自治会リレー随筆

より素晴らしい街へ



皆様にとって、2001年の始まりは、昨年ま
でと、どこか違う日々で始まったでしょうか。

1日、1月の違いは、はっきりとは分かりませ
んが、10年単位で見回すと、この街もずいぶん変わりました。

いつでしたか買物に出た時に、御高齢の方に久しぶりにお会い
しましたら、「昔の人に会えたなんて嬉しい」と言われました。
それ程、住む人も街の雰囲気も変わったのでしょうか。

年配の方々の記憶の中の風景は、中原街道の真ん中を歩いて学
校に通ったり、牛が引く荷車がゆったり通っていたり、街のあち
こちに草原があって、子供たちの良い遊び場になっていたことな
どでしょう。三井信託の寮の所で風上りをした思い出をお持ちの
方もいらっしゃるでしょう。

雨降りの後の道の水溜まりで、長靴の中もびしょびしょにした
思い出はありませんか。眼をつぶると、30年前の雪谷の街はまだ
緑豊かな色で浮かんできます。

この街が、子供たちが大人になり他の街に住むようになった時
に、自分の故郷だと思い出してくれるような街になったらと願っ
ています。

街のあちこちに木の緑や、色とりどりの花が咲いていて、子供
たちの明るい声があり、きれいに掃除された道が一つの風景にな
るように、街と住んでいる人々を大切にして、次の時代に引き継ぎ
ましょう。

(南雪谷 大竹 みどり)

投 稿

先日、久しぶりに二歳半になる次男を連れて、我が家の近くの小
池釣堀公園に出かけた。

しばらくして、ブランコとすべり台にあきた次男は、公園の脇に
ある斜面を上がりはじめた。私はいつ転びはしないかと心配でその
後を追いかけると、案の定、雨上がりで湿っている路面で滑って転
びズボンに土がついた。土を手ではらおうとしたら、土の持つあの
独特のニオイが鼻についた。長いこと忘れていた土のニオイである。
どんな香水のニオイよりも私には意識の一番深いところから
ホッと安堵感を持つことのできる土のニオイであった。

その時、地球上のどこにでもある土のニオイに今更感動する程、
文明社会の我々は自然から離れているのだと実感した。

昔九十歳を過ぎて元気な老翁が、素足で土を踏むことが健康の秘
訣だと書物の中で自信たっぷりに主張していたことを思い出した。

最近、すぐにカッとなってキレる子供が増えていると言う。そ
の子供たちは、土のニオイを忘れてしまっているのかもしれない。

フランスの思想家ジャン・ジャック・ルソーは
「自然に帰れ」と言った。青少年教育の中に「自
然に帰れ」という一項目を大きく掲げるべきかも
知れないと思いながら、家路についた。



(小池 松原 仁)

実りたる 朱葉に到る 初日影
(小池 錦木 きめ子)

むらさきの 夕富士窓に 初句会
(小池 酒井 里江)

若菜買ふ 古人を 偲びつつ
(小池 斎藤 あつ子)

初日さす 台場に舞えし ゆりかもめ
(笹丸 小倉 英靖)

俳 句

短 歌
松に添へ 活けし白百合 千雨の
香りほのぼの 初春を迎ふる
(笹丸 濱邊 はつ子)



この情報誌は古紙70%の用紙を使用しています。